

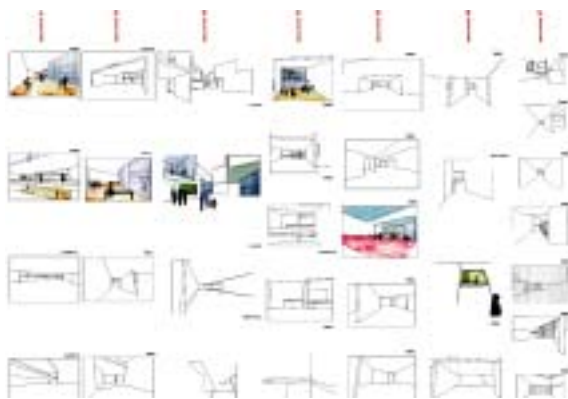
関係ノ二重螺旋 ~ small office village yokohama ~ **優秀賞**



千葉大学 工学部 デザイン工学科建築系

黒澤 清高

-----建物をつくること、と同時に、建物に付带的にツイテマワル外部空間の構築 -----
現在、映像文化地域として開発進行中の横浜・新高島地区でのスモールオフィス集合体の計画。新しい街が出来ようとしている場所で、‘ビル’のようなオブジェクトの林立が生む‘無機的な外部’や‘境界線’を打ち消す、--建物によって出来る内部も、外部も、働く人も、歩く人も、建物も、またその人たちの様子も--が渾然一体となるような建築の方法と、まちの在り方を探りました。このオフィスの集合体は、ちょうど、遺伝子の二重螺旋構造のように、二つの背反するモノ[建築 / 付带的な外部]が連続して絡み、関係し合う空間構成によって1つの纏りを作る、建物だけで完結する事の(でき)ない建築です。



講 評

石の壁や柱のみが残る古代遺跡では、かつての居間も中庭も機能を喪失し、青空のもとで対等に空間性を重層させ、魅力ある建築の本質を問いかけている。そうした連想も可能な本提案の模型は、外部空間も内部も等価に捉える作者の意図を、ストレートに表現して秀逸である。白い壁とスラブは、建築の骨格となる構成要素として、空間に関係性を与えている。そして、場所ごとに嵌め込まれた、淡緑色や何種類もの霞がかかったアクリル板は、さまざまな活動を展開するスモールオフィス群の個々の息づかいを感じさせ、機能をあぶり出している。まさに、『形態の問題より、その「関係」に焦点を当てる』作者の意図は十分に伝わってくる。さらに、最も規模の大きい部分は、大地と同じボール紙製であり、関係性の問題は「平面と隆起」の連続性や絡み方にまで発展しそうな気配さえある。

総じて修練の習熟度を感じさせる、完成度の高い作品といえる。なお、審査会では、こうした内外の巧みな構成が、敷地を越え道路や隣接地、都市へと、どのように絡んでいくのか、その意識は伺えるものの、より具体的な表現を期待する声があったことを付記する。

[審査員 柳瀬寛夫]